擱筆の辭

終古不惑者は維斗也。萬劫不息者は日月也。洵に翛然として往き、翛然として來り、四時の變に通じて、六極の眞を體得する彼等は、幸ある哉。彼の黼黻絺繡一代の美麗、燦として八紘を輝かすあるも、而も澎湃たる時潮の流、沛乎として倒まに紫瀾を捲くや、物と人と盡く掀翻呑噬せられずんば止まざるもの、則吾人生に非ずや。天の清輕、地の濁重、同じく命を造化に享けて、人間、何ぞ獨り夙夜に、惴々たる。渾沌たる哉、擾焉たる哉、偶高遠を闡明して學智あり、神秘を照燿して文明ありと雖、田畝の或は鶉とあり、朽爪の時に魚とある、啻に珍として見る可きのみに非ざるを奈何。若し夫れ龍南國を成して二十年、其間華を咀ひ、英を含み、卓爾として理想の淨境を憧憬する事、肅々たり、拳々たり、蟠蟒を悅ばず、瓠犀に親ます、煌々獨り輝く剛毅朴訥、鬱乎として眞に海西の偉觀たり。惟ふに楡枋を搶いて自ら傲然たるものは、蜩と鷽鳩とのみ。苟も水擊三千里、背に青天を負ふて、圖南の鵬志を伸べんもの、奚すれぞ妄に彼の大椿と彭祖とを羨まんや。首飛蓬の如きは我の慮る所に非ず、青春氣鋭の人、唯活動あるのみ、向上あるのみ。主義の楯、信念の矛、以て邁往すべく、以て直進すべし。此時我に魑魅なく、魍魎なく、乾坤一擲の業則ち成らむのみ。遮莫今や時代の暗流日夕餘を載せて、變巧笑の倩深く心目を眩惑せんとす。危い哉、汲々乎たり。嗚呼知らず、翹々獨り擢むでて、晨朝の第一鐘を杵かむもの抑誰ぞ。思ふて爰に到る、纖絺の備或は足らざるを憂ふるもの、獨吾人同人のみなる可き乎。

顧みれば、吾人重を本誌に荷ひて、正に一星霜。閑々たる小知、瞻々なる小言、塗鴉徒らに罪を君子に求めて、憤を人に買へり。野夫素佩玉の灘に嬾はず、忸怩として慚愧殊に深し。實にや富嶽の紫を以て蘇山の黒に譬ふ、倫寔に當らざる也。鴨水の綠を以て白河の黄に比す、類素より同じからざる也。而も彼の黒と、此の黄と、夫れ自らに於て、一個確實の意義と特色とを、包有するとせば、必ずしも紫なるを要せじ、必ずしも綠たるを須ゐじ。由來吾人菲才庸劣、焉ぞ潛して富嶽の紫と、鴨水の綠とを求めんや。唯夫れ蘇山の黒と、白河の黄とは、或は以て之を希及し得べけむ乎。自家の妍醜自家之を知ると言はゞ、吾人の察多く誤らざるに庶幾からん哉。況むや龍鳳流蘇を吐いて後にあり、灼々たる精華、一時の秀を萃めて、龍南是より巽來長く煥發すべきをや。

今や江城春漸く暮れんとして、柳絮飛ぶ事頻也。黄鸝落紅を悲むで、峽蝶夢香に泣く。遊子景を憂ふ長鋏の嘆、希くば千金の身を傷つて、圖南萬里の志を沮む勿れ。聊蕪辞を敷いて擱筆の辞とゐす。

明治四十一年四月

船越純一
石田馨
立花親民
加瀬丈兵衛
前田穰